



ACのJapanese Dayでお手前の披露(手前左が筆者)

うーん、多分行くけど何か突発的なことがないとも限らないし、とりあえず「Maybe」と答えた。すると「一限目の授業行く?」というので、やっぱり「Maybe」が続いてまた何か聞いたので「Maybe」とうとうと彼女は「まじめに答えてよ!」と怒ってしまった。人が一歩踏み込んで決断を下すことで進んできた文化と、むしろ踏み込むことをさけて全体を生かすことで進んできた文化とでは、人の「判断」に対する信頼性(それとも樂觀性?)のレベルが随分違うんだ、と感心したことを覚えている。環境は人の育ちにどう影響しているのか、人種による違いはいったい何なのか、人として普遍的なものとしてでないものは何か。このような関心が帰国後心理学を専攻することにつながったのだと思う。

ACに集まった仲間たちの背負っている文化や考え、生き方には本当にバリエーションがあった。当時はまだ厳しい共産制を敷いていた東欧から来ていた仲間は、おそらくは政治的な理由で、ある休暇明けから姿を見せなくなった。発展途上の国から奨学金で来ている子もいたし、おそらくは世界的にみても富裕な一族の子どももいた。宗教が生き方を厳しく限定している仲間もいたし、民族古来のおおらかな生活観を信頼している仲間もいた。

しかし、これこそは全く若者の特権だと思ふのだが、同じ寮に住み一緒に食事をし、机を並べ、activity(クラブ活動)で一つになって荒れる海に立ち向かい、時にはとんとんハメを外して、みんな本当に真剣に生きていたので、互いの違いを極めてストリートに認め合うことができた。ストリートに認め合えれば、違いは違いであって、それ以上でも以下でもない。むしろ違いがあることこそが現世の人間としては自然であって、しかし、さまざま違いを内包しながらも真摯に向かい合えば必ず気持ちに通じ合うということ、そのことが生きる上でいかに大きな喜びになりうるかということ、そしてそのためには、やはり一人一人が熱く目的に向かって生きようとしていることが必要であること、そういつたいわば根源的な肯定的人間観を得ることができた。人という存在の在り方、とりわけその内面の

成り立ちやそれへの支援の在り方について探りたいという現在の生き方は、おそらくその延長線上にあるのだと思う。多くの同窓生のように国際的な意味での「世界」へ翔ぶことはなかったが、人の内面に広がる「心の世界」へと翔んだことになるのだろうか。

### これからの子どもをどう育てるか

われわれの社会は、今、子どもの育ちを支えてきた従来の社会の在り方とは、全く異なる方向に進みつつある。自然との関わりの希薄化、都市の二四時間化、少子化はもちろんのこと、ITの普及さえもが、それがなければ存在したはずの他者との生のやりとりや、主体的な判断や試行錯誤的体験といった、子どもにとっては欠かすことのできない成長の機会を確実に奪っていく。

地球規模で拡大する経済的格差や環境問題も含めて、人類の未来を賭けた実験が始まっている。子どもの中に何を育てることが本当に大切なのか、そのためには何を残し何を新しく構築すべきか。UWCというかけがえのない向かい合いの場を用意し私たちの育ちを支えてくださった先輩たちのように、今度は私たちが心をくだき決断する番である。ACで確かに学んだように、人は好むと好まざるにかかわらずそれぞれに課せられたものがあるが、熱く生きたい思いを合わせれば、必ず新しい世界を切り拓いていけるはずなのだ。

# 熱く生きればつながり合える

—子ども研究へと進ませた留学体験—

滋賀大学教育学部教授

菅 眞佐子  
すが まさこ

大阪府立天王寺高等学校より一九七三〜七五年 UWC Atlantic College に留学。大阪市立大学文学部、京都大学大学院で発達心理学を専攻。八七年より滋賀大学に勤務。



## ▼三〇年前を振り返る

今、私は、滋賀大学教育学部というところに勤めている。大学では、主として幼稚園の先生を志す学生を教え、附属幼稚園との連携研究や、滋賀県等から委嘱される委員会・研修会の合間をぬって、子どもの認知発達や幼児期の教育のあり方について細々と研究している。国立大学の独立行政法人化、教員養成系大学の統廃合といった高等教育変革の嵐にもまれながら、若者たちの自分探しを手伝い、育ちにくい世に生まれてきてくれた幼い子どもたちをいかに支えるか、ない知恵と体力・気力をしぼる毎日である。私の場合にはアトランティック・カレッジ(A.C.)への第二回留学生(一

九七三〜七五年)であったから、そのときからすでに三〇年近くが経過していることになる。これまで、その時その時に与えられた環境や選択肢の中で自分に正直に自然に生きてきたと思っていたが、今回コラムへの寄稿依頼を受けて振り返ってみると、A.C.で一七歳の自分が感じ、考えたことが、今の自分の生き方を確実に支えていることに驚いた。あるいは、ひよっとすると、その当時には豊かではあるが言語化には至らない感情体験であったものが、今振り返ってみることで、それが本当に意味していたのであろうことを、はつきりすることばにできるのかもしれない。いずれにしても、三〇年前の彼方からエピソードを掘り起こしてみるのはなかなか楽しい作業なのである。

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三八八名の卒業生を輩出している。

## ▼さまざまな文化的背景を持つ仲間との出会い

留学中のエピソードはそれこそ数え切れないが、現在の生き方との関連で見れば、一つには、「人の表現や思考体系は、その人が背負っている背景次第」と感じる機会が、とにかくたくさんあったことを覚えている。たとえば、あるとき足の小指を痛めて、確か「Oh, my little finger!」というような表現をしたのだと思う。するとドームメイト(寮の同室者)が「それって your little toe のこと?」と大笑いしたことがあった。日本的には「足の指」という概念があるが「finger」は確かに手の指のことなので、「なるほど、彼女の頭には、足の指が生えたようなイメージが伝わって大笑いしたんだろうな。'Toe」という表現でひとかたまりにとらえるのは、やっぱり靴の文化なんだ」と感心したことを覚えている。

またあるときは、ドームメイトが「明日は morning swim 行く?」と尋ねるので、